

幼児期の親子関係と向社会的行動・攻撃行動のモデリング(2)

—父母の態度パターンによる分析—

Influences of Parent-child Relations on Modeling of Prosocial Behavior & Aggressive Behavior in Young Children—2

—Analysis by Parental Attitude Pattern—

森 下 正 康

MORISHITA Masayasu

(和歌山大学教育学部)

2005年9月30日受理

本研究の目的は、幼児について、父母のどのような態度パターンにおいてどのようなモデリングが生じているかを明らかにすることであった。そのために、次のような仮説を立てた。仮説1. 受容的な態度や統制のゆるやかな態度を示す親に対して、向社会的行動のモデリングが生じるだろう。仮説2. その反対に、拒否的な態度や統制的な態度を示す親に対しては、攻撃行動のモデリングが生じるだろう。仮説3. リーダーシップを持つ親に対して、向社会的行動や攻撃行動のモデリングが生じるだろう。これらの仮説を検証するために、3, 4, 5歳児の父親と母親に対して、子どもおよび自分自身について向社会性と攻撃性に関する評定と養育態度に関する評定を求めた。また、幼稚園の担任教師に対して子どもの向社会性と攻撃行動に関する評定を求めた。すべてのデータがそろった244組について分析した。モデリングの指標としての親子間の相関(類似性)と父母の態度パターンとの関連を検討したところ、子どもについて父親母親の評定に共通する次のような結果が得られた。(1) 男児について、父親が統制的で母親が統制のゆるやかなパターンの場合、男児の向社会性得点と母親の向社会性得点との間に有意な正の相関があった。また、父母のリーダーシップが共に高い場合、男児の向社会性の特徴は母親の向社会性の特徴と類似していた。(2) 女児について、父母共に受容的な場合、女児の向社会性の特徴は父親の高い向社会性の特徴と類似していた。(3) 父母共に統制的な場合、男児の攻撃性の特徴は母親の攻撃性の特徴と類似し、全般に高い攻撃性を示していた。また、父親の方がリーダーシップをもつ場合、男児の攻撃性の特徴は母親の攻撃性の特徴と類似していた。以上、部分的に仮説1, 2が支持されたが、仮説3は反対の結果もあった。また、向社会性にしても攻撃性にしても男児は母親を向社会性および攻撃性のモデリング対象としているのに対して、女児は父親を向社会性のモデリング対象としている可能性があるということが示唆された。

キーワード：親子関係、養育態度、モデリング、向社会的行動、攻撃的行動、幼児

問題

幼児についてどのような親子関係のなかでどのようなモデリングが生じているのか。前回の研究(森下・庵田、2005)では、父親、母親それぞれの養育態度の特徴と親子間の類似性について分析し、モデリングという視点から考察した。そこでは父親の態度と母親の態度を別々に扱い、親子間の類似性について分析した。その結果、いくつかの知見が得られたが、限界もあった。例えば、父親が統制的な場合に男児の向社会性の特徴は母親に類似するということが明らかになったが、その場合に母親の態度の特徴は関連するのかわからないのかという点が不明であった。

現実には、子どもはまわりの人々とさまざまな関係を結びながら、その中でまわりの人々を選択的にモデ

リングの対象としていると考えられる。本研究では、そのような複数のモデルのなかでどのような親をモデルとするか、どのような行動や特性をモデルとするかという視点から検討したい。

子どもにとって父親と母親は、行動や考え方の重要なモデルとなっている。ただし、父親であるとか母親であるとかいうだけでモデルとなるのではなく、そこでどのような親子の相互作用が行われているかが重要な要因となっている。本研究ではどのような父母との関係のなかで、子どもは父親、母親のどちらをモデルとして選択しているかに焦点を当てたい。

そのために、親子関係の一端を反映していると考えられる養育態度を測定して、父親と母親の養育態度の特徴をそれぞれ組み合わせて養育態度パターンを構成する。そして、どのような父母の態度パターンにおい

て、子どもは父親母親のどちらの特徴をモデルとしているかを分析する。

従来の研究結果を総合すると、次のような基本仮説が考えられる(森下、1996)。愛情が豊かで受容的な親子関係や、統制が緩やかで子どもの意志を尊重する親子関係のようによい親子関係において、親が望ましい行動や特性を示すとき、子どもはその親の行動や特徴をモデルとすると考えられる。この仮説の根底には、よい親子関係においては親の期待に応えたいという動機が芽生え、その結果、親をモデルとして親の期待する望ましい特性を形成するという仮定がある。この仮説は依存的同一視説を発展させたものになっている。

それとは対照的に、愛情の乏しい拒否的な親子関係や、子どもの意志を無視した統制の厳しい親子関係においては、その親をモデルとして望ましくない特性が形成されると考えられる。この仮説においてはその根底に、よくない親子関係から生じる子どものフラストレーションや攻撃性が媒介していると仮定している。

望ましい特性とか望ましくない特性とか簡単に判断できないが、本研究では一応、向社会的行動が豊かな状態を望ましい特性と考え、その反対に攻撃行動が多い状態を望ましくない特性と考えている。

したがって、父親母親の態度と親子間の類似性について次のような作業仮説を設定した。

仮説1. 受容的な態度や統制のゆるやかな態度を示す親に対して、向社会的行動のモデリングが生じ、親の向社会的性が豊かであればあるほど、子どもも豊かな向社会的性を示すだろう。

仮説2. 拒否的な態度や統制的な態度を示す親に対しては、攻撃行動のモデリングが生じ、親の攻撃性が強ければ強いほど、子どもの攻撃性も強いらる。

従来、男児と女児はそれぞれ父親母親のどちらをモデルとして選択するかというテーマについて論じられてきた。発達論の同一視理論によれば、幼児期の初期には男女共に母親への同一視が、後期には同性の親への同一視が生じやすいと考えられている。フロイト的な考え方からすれば、幼児は異性の親の愛を得るために同性の親に同一視すると予想される。すでに示したように、同一視とモデリング概念は、その理論背景は異なるが同じような現象を問題にし、同じメカニズムを扱っている(森下、1996)。どちらの親をモデルとするか、本研究を通じて明らかにしたい。

上記とは異なった視点から、子どもは有能な人や権力を持つ人に同一視するという役割理論からの仮説が考えられている。この仮説にしたがえば、父親と母親のどちらがリーダーシップを持つかによって、子どもがモデルとして選択する人が異なるということになる。したがって、次のような仮説が成立する。

仮説3. リーダーシップを持つ親に対して、向社会的行動や攻撃行動のモデリングが生じるだろう。この

場合は特に特定の行動や特性へのモデリングではなくて、広くモデリングが生じると予想される。

本研究においては、上記のような仮説に沿いながら、どのような親子関係のパターンにおいて父親・母親へのモデリングが生じるか、それは特性によってどのように異なるか、男児と女児ではモデリングの対象や内容が異なるかどうかという課題を検討する。

方法

先の研究(森下・庵田、2005)と同じデータを基に分析した。ここでは基本的な手続きについて記述する。

1. 調査対象

幼稚園の3, 4, 5歳児の父親と母親および担任教師が調査の対象になった。記入漏れや同一人物が記入したと思われるデータをのぞき、すべてのデータのそろった244組(男児133、女児111)を分析した。

2. 手続き

担任教師に対してはクラスの一人ひとりの子どもについて、向社会的行動と攻撃行動に関する質問紙への評定を求めた。各園児の父親母親に対しては、子どもと自分自身について向社会的行動と攻撃行動に関する質問紙と、養育態度に関する質問紙への評定を求めた。

3. 質問紙の作成

(1) 園における子どもの向社会的行動と攻撃行動
園での向社会的行動や攻撃行動を測定するために、森下(2001)の作成した16項目を用いた。

(2) 家庭における子どもの向社会的行動と攻撃行動
家庭での子どもの向社会的行動を測定するために横塚(1988)、森下(1998, 2000)、岩立(1995)を参考に12項目を作成した。攻撃行動については森下(2000)の8項目を用いた。

(3) 父親母親の向社会的行動と攻撃行動

親の向社会的行動を測定するために菊池(1988)、横塚(1989)から10項目を用い、攻撃行動については安立(2001)から10項目を用いた。

以上の各項目に関して4段階評定(3. そうだ、2. ややそうだ、1. ややちがう、0. ちがう)を求めた。

(4) 父親母親の養育態度

鈴木ほか(1985)の作成した受容、子供中心主義、統制、敵意の含まれた統制、一貫性のないしつけの5尺度からそれぞれ5項目ずつ、小嶋ほか(1988)の作成した実権に関する尺度から5項目、合計30項目を用いた。そして、5段階評定(4. たしかにそうだ、3. まあそうだ、2. どちらともいえない、1. あまりそうでない、0. まったくそうでない)からなる質問紙を作成した。

4. 尺度の作成

(1) 因子分析

それぞれの尺度項目について、因子分析を行った。まず主成分分析を行い固有値の変動に注目して因子数を決定し、次に主因子法による因子分析を行い、最終的にプロマックス回転を行った。

担任評定による子どもの行動項目について因子分析の結果、2つの因子が得られ、それぞれに高く負荷する項目内容から、向社会性因子と攻撃性因子と命名した。そして各因子に高く負荷する項目を用いて尺度を構成した。

次に、子どもの行動に関する父親と母親の評定データを一緒にして因子分析を行った。その結果、2因子が得られた。それぞれの因子に高く負荷する項目の内容は、担任が評定した因子と対応しており、向社会性因子と攻撃性因子と命名し尺度を構成した。

父親と母親自身の行動に関する項目についても、父親と母親のデータを一緒にして因子分析を行った。その結果、向社会性因子と攻撃性因子が得られ、尺度を構成した。

親の養育態度についても父親と母親のデータを一緒にして因子分析を行い4因子を得た。その因子の内容は、子どもに対する受容、統制、態度の矛盾、養育における主導権(リーダーシップ)に関するもので、それぞれ受容因子、統制因子、矛盾因子、実権因子と命名し尺度を構成した。その内、受容尺度、統制尺度、実権尺度を本研究の分析に用いた(表1)。

各尺度に関する信頼性を確認するために α 係数を算出した。いずれの尺度も高い信頼性を示していたので、各尺度項目の評定得点の和を求め、それぞれの尺度得点とした。

(以上、項目内容等は森下・庵田(2005)を参照されたい。)

表1 親の養育態度尺度の項目

受容的態度(α 係数:0.780)

1. うちで子どもと楽しい時間を過ごす。
2. 子どもが喜びそうなことを、いつも考えている。
3. 子どもにたびたび話しかける。
4. 子どものことにじゅうぶん気を配っている。
5. 子どもと一緒に、外出や旅行をするのが好きだ。
6. 自分にとって、子どもが何よりも大切だ。
7. 自分のことは我慢しても、子どものためにしてやるのがよくある。
8. 子どもが怖がっているときには安心させてやる。

統制的態度(α 係数:0.769)

1. 子どもに対しては、決まりをたくさん作り、それをやかましく言わなければいけないと思う。
2. 子どもの行儀をよくするために罰を与えるのは、正しいことだと思う。
3. 子どもを、自分の言いつけどおりに従わせている。
4. 子どものした悪いことは、みな、何かの形で罰を与えるべきだと思う。
5. 子どもには、できるだけ私の考えどおりにさせたい。
6. 子どもがすべきことをちゃんとしてしまうまで何回でも指示する。
7. 子どもに、何事もどんなふうにしたらよいかを、ことこまかに言い聞かせる。
8. 子どもが言いつけ通りにするまで子どもを責めたてる。

実権尺度(α 係数:0.680)

1. 子どもの教育に関することがらは、たいてい夫(妻)ではなく私が決めている。
2. 子どもがケガをしたり病気になったとき、てきばきと処理するのは夫(妻)よりも私である。
3. 子どもの行儀やしつけについてやかましいのは、夫(妻)よりも私のほうである。
4. 私の全生活は、子ども中心に動いている。

結果

1. 尺度間の分析

まず、子どもに関して父親と母親の評定間にどのような関連があるかについて検討した。表2と3に向社会性と攻撃性について評定間の相関係数を示す。向社会性と攻撃性のいずれの特性についても、また男女に共通して、父親と母親の評定の間にはかなり高い有意な相関がみられた。したがって、子どもの評定に関しては信頼性が認められるといえよう。

しかし、園における担任教師の評定と父親母親の評定の間では、男児についていずれの特性も有意な相関はなかった。女児の場合は、いずれの特性も有意な相関がみられたが、その値は高いものではなかった。このような結果は、他の研究(森下, 2002)でも認められ、評定の信頼性の低さというよりは、子どもが家庭と園という異なった場面で示す行動の違いを反映している可能性がある。

次に、向社会性得点に関して父親と母親、親と子どもの間の単純な相関係数を算出した(表4)。男児の父

表2 子どもに関する評定間の相関(向社会性)

	男 児		女 児	
	父評定	母評定	父評定	母評定
母 評 定	511**		546**	
担任評定	-016	038	315*	224*

表3 子どもに関する評定間の相関(攻撃性)

	男 児		女 児	
	父評定	母評定	父評定	母評定
母 評 定	508**		540**	
担任評定	073	160	250**	318**

親と母親の向社会性得点間には有意な相関はなかったが、女兒の父親と母親との間には低い有意な相関がみられた。男女児に共通して、父親と母親それぞれの向社会性得点とその親自身の評定した子どもの向社会性得点との間には有意な相関があった。また、一部を除いて、父親と母親それぞれの向社会性得点は、他方の親の評定した子どもの攻撃性得点の間に低い有意な相関があったが、担任教師による子どもの評定得点との間には相関はなかった。

攻撃性に関して(表5)、男女児の父母に共通して、父親と母親の攻撃性得点間には有意な低い相関があった。また男女児の父親の攻撃性得点は父親の評定した子どもの攻撃性との間に低い有意な相関があった。母親については、同じような相関は男児の場合にだけみられた。父親と母親それぞれの攻撃性得点は、他方の親の評定した子どもの向社会性得点や、担任教師による子どもの評定得点との間には相関はなかった。

以上の結果から特徴的なことは、向社会性に関して母親と男児、および母親と女兒の間ではいずれもかなり高い類似性がみられるということであった。また、父親と女兒の間でも類似性が高かった。攻撃性に関しては、そのような高い類似性はみられないというのが特徴であった。さらに担任評定による子どもの特徴と親の特徴との間には類似性はみられなかった。

表4 親と子どもの相関(向社会性)

評定者	男児		女兒	
	父親	母親	父親	母親
父親	--	139	--	254**
母親	139	--	254**	--
子父評定	280**	311**	389**	268**
子母評定	012	443**	232*	408**
子担任評定	-105	-112	142	116

(小数点省略) * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

表5 親と子どもの相関(攻撃性)

評定者	男児		女兒	
	父親	母親	父親	母親
父親	--	281**	--	253**
母親	281**	--	253**	--
子父評定	245**	081	224*	120
子母評定	077	198*	097	149
子担任評定	022	-127	079	155

2. 養育態度パターンと親子間の類似性

親の養育態度パターンによって、親子間の類似性が異なるかどうかをみるために、次のような分析を行った。まず、父親と母親の各養育態度について、それぞれ中央値をもとめた。次にその得点より高い(H)群と低い(L)群に2分割し、父母を組み合わせて4パ

ターン(LL, LH, HL, HH)を構成した。次に、男女別に各特性得点について群ごとに親子間の相関係数を算出することにした。本研究では子どもの評定に関して、評定間にある程度一致の見られた父母の評定を用いることとした。

有意な相関係数が得られた場合、親子間でどのような類似性が高いのか、つまり得点の高いところでの類似が多いのか、低いところでの類似が多いのかをみるために、向社会性得点と攻撃性得点について各尺度の中央値を基準とし(表6)、 χ^2 検定を行なった。

表6 向社会性得点と攻撃性得点の中央値

評定	父	母	父子	母子	園子
向	男 19	23	20	21	11
社	女 19	24	22	23	14
攻	男 12	10	12	9	5
撃	女 12	10	11	8	2

(例示) 父子：子どもについての父親の評定

(1) 父母の受容パターンと向社会性(表7)

養育態度の受容パターンについて、親子間の向社会性の相関を表7に示す。子どもの特性については父親と母親が評定しているために2種類の測定値がある。その二つの測定値と親自身の得点との相関が共に有意であった態度パターンに焦点を当てながら分析する。

① 女兒について、受容HH群(父母が共に受容的な場合)において、父母の評定した女兒の向社会性得点は、いずれも父親の向社会性得点と有意な正の相関があった。その内、母親評定による女兒の向社会的性得点と父親の向社会性得点との相関の様子を図1に示す。父親の向社会性得点が高ければ高いほど女兒の向社会性得点も高いことがわかる。さらに χ^2 検定の結果、父親の得点も女兒の得点も高いところでの一致が有意に多くみられた。

次に母親評定について、受容LL群とHL群において、男児の向社会性得点は母親の向社会性得点と相関が高かった。さらに、注目すべきことに、男児も母親も向社会性得点が中央値より低いところで、類似している者が多いということが明らかとなった(図2)。

(2) 父母の受容パターンと攻撃性(表8)

子どもの攻撃性に関する父母の評定と親の攻撃性に関して、共通した結果はみられなかった。

父親評定によれば、LL群とLH群において女兒と父親の攻撃性得点の相関が有意であった(図3)。そのような傾向は男子にもみられた。さらに、LL群とLH群では男女共に攻撃性得点が高い子どもが多いということも明らかとなった。

(3) 統制パターンと向社会性(表9)

② 父母の評定で共通した結果について、男児のHL群において父母の評定した男児の向社会的性得点は

表7 受容パターンと親子間の相関(向社会的性)

子の評定者	父との相関		母との相関	
	父	母	父	母
LL (51)	113	064	191	522**
男 LH (24)	392	271	084	310
児 HL (21)	313	-253	392	655**
HH (37)	298	-056	450**	152
LL (34)	332	232	170	284
女 LH (21)	-124	-138	073	208
児 HL (29)	329	043	205	292
HH (27)	600**	451*	327	286

() 内の数は子どもの人数を示す

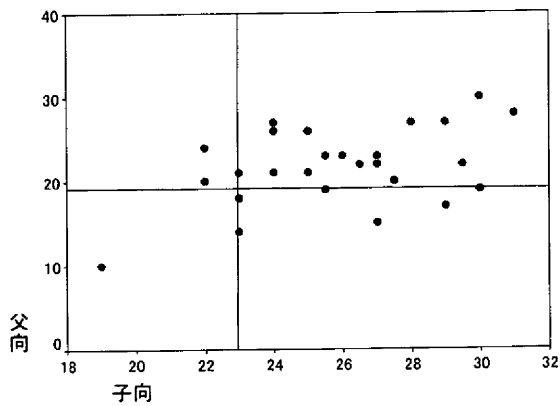


図1 受容HH群の父親と女兒(母評定)の散布図: 向社会的性

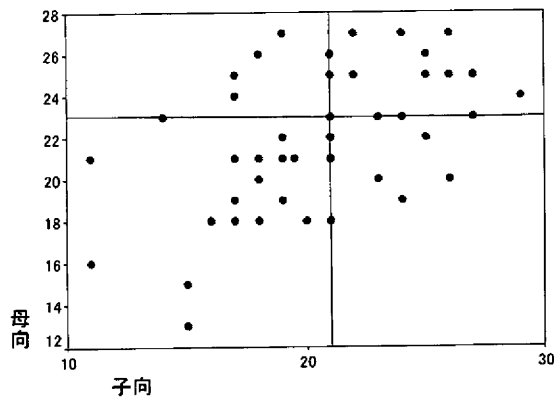


図2 受容LL群の母親と男児(母評定)の散布図: 向社会的性

いずれも母親の向社会的性得点と有意な高い正の相関があった。

③ 女兒のHH群において、父母の評定した女兒の向社会的性得点はいずれも父親の向社会的性得点と有意な正の相関があった。

④ また女兒について、HH群において父母の評定した女兒の向社会的性得点はいずれも母親の向社会的性得点とも有意な正の相関があった。

以上、一部のパターンを除いて、女子の向社会的性得点は父親母親の向社会的性得点と相関が高いなかで、特

表8 受容パターンと親子間の相関(攻撃性)

子の評定者	父との相関		母との相関	
	父	母	父	母
LL (51)	294*	-023	053	216
男 LH (24)	327	071	-084	113
児 HL (21)	-113	-265	446*	222
HH (37)	100	221	-084	-046
LL (34)	425*	043	360*	236
女 LH (21)	484*	145	-010	-109
児 HL (29)	-226	-009	-095	215
HH (27)	186	109	-023	087

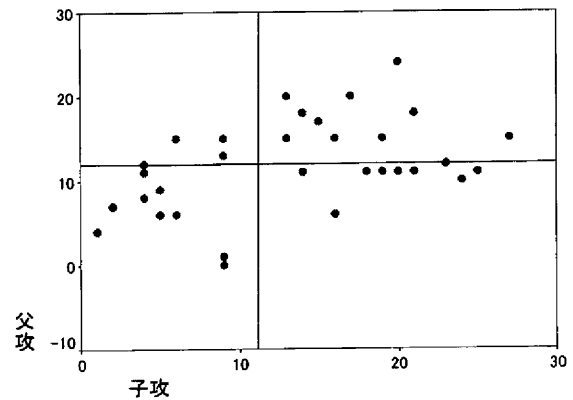


図3 受容LL群の父親と女兒(父評定)の散布図: 攻撃性

表9 統制パターンと親子の相関(向社会的性)

子の評定	父との相関		母との相関	
	父	母	父	母
LL (46)	333*	-012	279	283
男 LH (23)	070	-218	-054	185
児 HL (28)	346	175	601**	720**
HH (36)	302	042	166	518**
LL (31)	250	147	234	363*
女 LH (25)	418*	280	244	213
児 HL (23)	450*	211	246	459*
HH (32)	482**	354*	449*	550**

に両親が統制的な場合にその傾向が明確に示された。

父親評定によれば、統制パターンを問わず女兒と父親の向社会的性得点の相関は高かった。男子では、LL群の相関が有意であった。

母親評定によれば、HL群とHH群では男児と母親の向社会的性得点の相関が高かった。また、一部のパターンをのぞき女兒と母親の向社会的性得点の相関が有意であった。

(4) 統制パターンと攻撃性

⑤ 父母の評定で共通した結果に関して、男児のH H群において、父母の評定した男児の攻撃性得点はいずれも母親の攻撃性得点と有意な正の相関があった。その内、父親評定による男児の攻撃性得点と母親の攻撃性得点に関する相関を図4に示す。父親評定も母親評定も共通した結果として、男児の攻撃性得点は高い者が多かった。

父親評定によれば、L L群において女兒と父親との攻撃性得点の相関が有意であった。図5に示すように、父親の攻撃性得点と女兒の攻撃性得点は共に低く、しかも親子は低い得点で一致するものが多かった。

表10 統制パターンと親子の相関 (攻撃性)

子の評定	父との相関		母との相関	
	父	母	父	母
男 LL (46)	053	-157	079	-102
男 LH (23)	341	-321	-520*	208
男 HL (28)	260	261	102	249
男 HH (36)	295	320	389*	395*
女 LL (31)	384*	-141	-173	113
女 LH (25)	-158	-088	293	222
女 HL (23)	159	-113	-277	-110
女 HH (32)	293	233	183	019

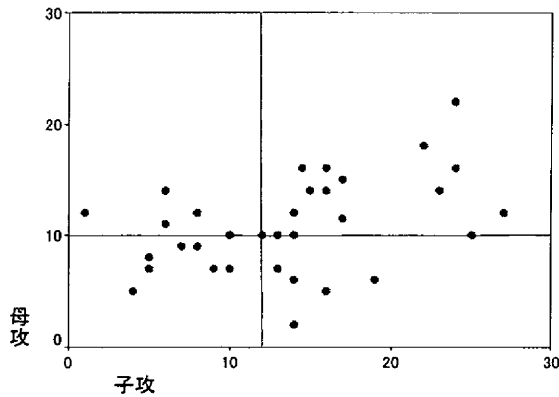


図4 統制HH群の母親と男児(父評定)の散布図：攻撃性

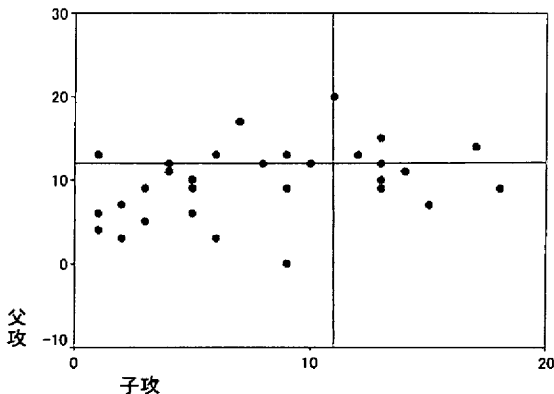


図5 統制L L群の父親と女兒(父評定)の散布図：攻撃性

表11 実権パターンと親子の相関 (向社会性)

子の評定	父との相関		母との相関	
	父	母	父	母
男 LL (36)	317	-047	257	165
男 LH (34)	321	-015	328	472**
男 HL (37)	432**	217	283	470**
男 HH (26)	288	-009	393*	692**
女 LL (17)	192	-083	167	413
女 LH (31)	307	311	355	241
女 HL (35)	590**	314	153	472**
女 HH (28)	283	087	323	476*

表12 実権パターンと親子の相関 (攻撃性)

子の評定	父との相関		母との相関	
	父	母	父	母
男 LL (**)	287	-169	-221	085
男 LH (**)	227	-012	009	-052
男 HL (**)	202	296	433**	461**
男 HH (**)	360	239	132	122
女 LL (**)	220	158	315	290
女 LH (**)	243	074	346	215
女 HL (**)	285	263	-030	160
女 HH (**)	360	239	132	122

(5) 実権パターンと向社会性

⑥ 父母の評定で共通した結果に関して、男児のH H群において、父母の評定した男児の向社会性得点は母親の向社会性得点と有意な正の相関があった。

父親評定によれば、H L群において男女児共に父親の向社会性得点と相関が有意であった。

母親評定によれば、男児ではL L群においてのみ有意な相関みられなかった。つまり父母のいずれもが実権(リーダーシップ)をもたない場合、男児は母親との類似性が低かった。

また母親評定によると、女兒ではL H群においてのみ低い相関であった。つまり母親が実権を持つ場合、女兒の向社会性の高さは母親のそれと類似しているとはいえなかった。

(6) 実権パターンと攻撃性

⑦ 父母の評定で共通した結果に関して、男児についてH L群において、父母の評定した男児の攻撃性得点は母親の攻撃性得点と有意な正の相関があった。

3. 父親の認知による母子間の類似性

態度パターンをめぐって、父親の評定した子どもの特徴と母親自身の特徴との間に、次のような独自の相関がみられた。

男児について、受容H H群において男児の向社会性得点は母親の向社会性得点と相関が有意であった。同じくH L群でも相関が高かったことから、父親が受容

的な場合は母親の態度にかかわらず、父親の評定する男児の向社会性の特徴は母親の特徴と類似していた。また受容HL群において、男児の攻撃性得点は母親の得点と相関が有意であった。つまり、父親が受容的で母親が拒否的な場合、父親の評定する男児の攻撃性の特徴は母親の特徴と類似していた。統制LH群において、男児の攻撃性得点は母親の攻撃性得点と有意な負の相関があったことが注目される。つまり、父親の統制がゆるやかで母親が統制的な場合、母親の攻撃性得点が高いほど男児の攻撃性得点は低いことを示していた。

女兒について、受容LL群において父親の評定した女兒の攻撃性得点は母親の得点と有意な相関があった。つまり、父母が共に拒否的な場合、父親の評定した女兒の攻撃性の特徴は母親の特徴と類似していた。

母親の評定した子どもの特徴と父親の特徴の間には独自の有意な関連はみられなかった。

以上、父親が受容的な場合、母親の態度にかかわらず、母親の向社会性が豊かであればあるほど男児の向社会性も豊かであった。また、父親が受容的で母親が拒否的な場合は、母親の攻撃性が強ければ強いほど男児の攻撃性も強かった。それに対して、父親の統制がゆるやかで母親の統制が厳しい場合、母親の攻撃性が強ければ強いほど男児の攻撃性は弱かった。父親はそのように男児と母親の間の類似性を認知していた。

同じように女兒と母親の間では、父母共に拒否的な場合に、母親と女兒の攻撃性の特徴が類似すると父親は認知していた。

母親の認知には有意な結果はなかったことから、このような類似性の認知は父親に特有のものであった。その父親も、母親と男児との間の類似性を多く認知している。この結果は、男児は母親をモデルとしている可能性が高いというすでに記した結果を反映するものかも知れない。このような結果の意味について、今後の検討が必要である。

4. 園での子どもの特徴と態度パターン

担任教師が評定した園での子どもの特徴と、父母の特徴との間には、次のような有意な相関が認められた。

受容パターンHL群において、担任評定による男児の攻撃性得点と父親の攻撃性得点との間に有意な負の相関(-0.454**)がみられた。つまり、父親が受容的で母親が拒否的な場合、父親の攻撃性得点が高いほど男児の園での攻撃性得点は高いという結果であった。

また、実権パターンLL群において、男児の向社会性得点と母親の向社会性得点との間に有意な負の相関(-0.352*)がみられた。つまり、父母どちらもリーダーシップを持たない場合、母親の向社会性得点が高いほど男児の園での向社会性得点は高いという特徴を示していた。

以上の園での子どもの特徴に関する結果についてどのように理解したらよいか、今後の課題である。

考察

特定の態度パターンにおいて、父親自身の特徴は父親の評定した子どもの向社会性や攻撃性の特徴と有意な相関があっただけでなく、母親の評定した子どもの特徴とも有意な相関があった。また同じようなことが母親自身の特徴についてもいえた。このように、データソースの異なる測度間で同じような結果が得られたことから、その関連の信頼性の高いことが示された。まずそのような結果に注目してみよう。

1. 父母の評定に共通した関連性

(1) 向社会性のモデリング(男児について)

男児に関する父母の評定から共通した結果について、次のようにまとめることができる。

受容パターンについては有意な関連はなかったが、統制パターンのHL群において、母親の向社会性得点と父母の評定した男児の向社会性得点との間に有意な正の相関があった。つまり父親が統制的で母親が統制的でない場合に、母親の向社会性が豊かであればあるほど、男児の向社会性も豊かであるという関連があった。これは単に母親自身の特徴が母親の認知する子どもの特徴と類似していたというだけでなく、父親の認知する子どもの特徴とも類似していたのである。したがって、ここでの類似性は、ある程度客観的な事実を反映していると考えられる。父親が統制的で厳しく母親が穏やかで優しいという親子関係のなかで、男児に母親の向社会性へのモデリングが生じている可能性がある。この結果は仮説1を支持している。

実権パターンのHH群において、父母の評定した男児の向社会性得点は母親の向社会性得点と有意な正の相関があった。一般に男児の向社会性の特徴が母親の特徴に類似しているという傾向のなかで、特に父母が共にリーダーシップを持つパターンにおいて、向社会性について男児は母親との類似性が顕著になるといえる。

以上のように、男児の向社会性の特徴は親子関係という相互作用のなかで、その相互作用のパターンに応じて母親へのモデリングが生じている可能性がある。

(2) 向社会性のモデリング(女兒について)

受容パターンのHH群において、父母の評定した女兒の向社会性得点は父親の向社会性得点と有意な正の相関があった。さらに父親の得点も女兒の得点も全般に高い値を示していた。つまり、父母が共に受容的な場合、女兒は向社会性の豊かな父親とその特徴が類似していた。したがって、受容的な父親や母親との安定した親子関係のなかで、女兒は父親をモデルとして豊

かな向社会性を形成する可能性がある。これは仮説1を支持する結果であった。

統制パターンHH群において、父母の評定した女兒の向社会的性得点はいずれもそれぞれ父親および母親の向社会的性得点と有意な正の相関があった。一部のパターンをのぞいて、女子の向社会的性得点は父母の向社会的性得点と相関が高いなかで、特に両親が統制的な場合にその傾向が明確に示されているようだ。つまり父母共に統制的な場合、女兒は父母両方の向社会的性へのモデリングが強く生じる可能性がある。これは仮説1に反する結果であった。両親が共に統制的というパターンは、幼児に統制的ゆるいモデルを対比できる機会がないので、女兒に無批判的な強い影響を与えるものと考えられる。

(3) 攻撃性のモデリング (男児について)

攻撃性について、統制パターンHH群において、父母の評定した男児の攻撃性得点は母親の攻撃性得点と有意な正の相関があった。さらにHH群では、攻撃性得点の高い男児が多いということが明らかになった。つまり父母ともに統制的ななかで、男児の攻撃性の特徴は母親の攻撃性の特徴と類似しかつ高い値を示していた。したがって、両親ともに厳しい統制的な親子関係のなかで、男児は母親をモデルとして高い攻撃性を形成する可能性があると考えられる。この結果は仮説2を支持していた。

また実権パターンHL群において、父母の評定した男児の攻撃性得点は母親の攻撃性得点と有意な正の相関があった。つまり、父親の方がリーダーシップをもつ場合、男児の攻撃性の特徴はリーダーシップの弱い母親の特徴と類似するということであった。これは仮説3に反する結果であった。

男児の攻撃性もまた親子関係のパターンに応じて母親へのモデリングが生じている可能性がある。

(4) 攻撃性のモデリング (女兒について)

女兒に関して、有意な関連はみられなかった。

以上、部分的に仮説1、2が支持されたが、仮説3は反対の結果もあった。また、向社会的にしても攻撃性にしても男児は母親をモデリングの対象としているのに対して、女兒は父親を向社会的モデリングの対象としている可能性があるということが示された。

子どもについて父母の評定の両方が、親の特徴と類似した態度パターンをみると、多くの場合、HH群であり父母が一致した態度傾向を示すものであった。そして、統制HH群では女兒には向社会的性のモデリングをもたらすのに対して、男児には攻撃性のモデリングをもたらしたことは注目される。男児と女兒では統制に対する受け止め方がちがうのかも知れない。つまり、女兒は父母が統制的な場合、統制的態度を肯定的あるいは無批判的に受け止めている可能性がある。

2. 父親評定と母親評定に独自の関連

ここまで父母が評定した子どもの特徴が、いずれも親の特徴と共通して類似する態度パターンについてみてきた。以下は、父親評定による子どもの特徴が父親自身の特徴と関連があるもの、および母親評定による子どもの特徴が母親自身の特徴と関連があるものについて取り上げる。これは同じデータソース内の関連をみているので、上記のような信頼性の高い結果とはいえないかもしれない。

しかし、子どもが父親との相互作用の中で示す行動特徴と、母親との相互作用の中で示す行動特徴は同じとはいえないだろう。そのことが父親と母親の評定内容のちがいで反映されている可能性がある。したがって、父母の評定が同じような結果を示さなかったからといって、信頼性がないということにはならない。

ここでの親子間の類似性は、父親あるいは母親の認知内に生じている類似性である。その類似性認知が特定の態度パターンに生じている点に注目し、モデリングという視点から解釈する。

(1) 態度パターンと向社会的性 (男児)

父親評定について、受容パターンに関しては有意な関連はなかった。

父親評定によれば、統制LL群の男児について向社会的性の相関が有意であった。つまり父母共に統制がゆるやかな場合、男児と父親の向社会的性に関する類似性が高かった。したがって、父母の統制がゆるやかな場合、男児は父親の向社会的性をモデルにしている可能性がある。

また実権HL群において、父親評定の男女児共に父親の向社会的性得点と相関が有意であった。つまり、父親の方が母親よりもリーダーシップを持っている場合、男女共に向社会的性の特徴は父親の特徴と類似していた。したがって、父親がリーダーシップを持つ場合、男児も女兒も父親の向社会的性の特徴をモデルとするのではないかと考えられる。これは仮説3を支持する結果であった。

母親評定について、受容LL群とHL群において、男児の向社会的性得点は母親の向社会的性得点と相関が高かった。つまり、父親の態度に関係なく母親が受容的でない(拒否的)場合に、男児の向社会的性の特徴は母親の特徴に類似していた。そして、その向社会的性得点は男児も母親も低い値を示していたのである。つまり、男児の向社会的性の特徴は母親の低い向社会的性の特徴と類似し、同じように低い特徴を示していた。したがって、拒否的な母子関係のなかで男児は向社会的性の低い母親をモデルとして、低い向社会的性を形成したのではないかと考えられる。このような結果は基本仮説を支持するものとなっている。この結果は、前回の分析結果(森下・庵田、2005)を確認することになったが、

不明だった父親の態度について「父親の態度に関わりなく」母親へのモデリングが生じるという新しい知見が加わることになる。

また母親評定によれば、統制HL群とHH群では男児と母親の向社会性得点の相関が高かった。つまり父親が統制的な場合、母親の態度にかかわらず、向社会性について男児に母親へのモデリングが生じるのではないかと考えられる。前回の分析では、父親が統制的な場合に母親と男児の相関が高いのは母親の統制が強いつきか弱いつきか不明であったが、今回の結果から母親の統制の強さにかかわらず相関が高いということが明らかとなった。

(2) 態度パターンと向社会性(女兒)

父親評定の実権HL群において、すでに述べてきたように女兒も男児と同じように父親の向社会性得点と相関が有意であった。

また母親評定において全般に相関が高いなかで、実権パターンLH群においてのみ女兒と母親の向社会性は低い相関を示した。つまり母親が父親よりもリーダーシップをもつ場合、女兒は母親を向社会性のモデルとしないということが示唆された。

(3) 態度パターンと攻撃性(男児)

男児に関しては有意な関連はなかった。

(4) 態度パターンと攻撃性(女兒)

父親評定によれば、受容LL群とLH群において女兒と父親の攻撃性得点の相関が有意であった。そのような傾向は男子にもみられた。またLL群とLH群では男女共に攻撃性得点が高かった。つまり、母親の態度に関係なく父親が拒否的な場合、子どもの攻撃性的特徴は父親の攻撃性的特徴と類似しており、かつ高い値を示していた。したがって、子どもは父親との拒否的な関係のなかで、父親の攻撃性へのモデリングを通じ強い攻撃性を形成するのではないかと考えられる。これは仮説2を支持する結果であった。

また父親評定によれば、統制LL群において女兒と父親との攻撃性得点の相関が有意であった。さらに父親の攻撃性得点も女兒の攻撃性得点も低いところでの一致が多かった。したがって、父母共に統制がゆるやかな場合、女兒は父親の低い攻撃性をモデルとして低い攻撃性を形成するのではないかと考えられる。この結果は、仮説1に沿ったものであった。

母親評定に関しては、有意な関連はみられなかった。

以上、仮説1と仮説2を支持する結果が得られた。この点は子どもについて父母の評定に共通した結果と同じであった。仮説3に関連して、子育てに父親がリーダーシップを持つ場合、男女児共に父親を向社会性のモデリング対象としているのに対して、母親がリーダーシップを持つ場合はそのような結果は得られなかった。先述の父母の評定に共通した結果として、父

親がリーダーシップを持つ場合、攻撃性について男児は母親をモデリングの対象としているという結果とは対照的であった。このように、同じリーダーシップを持つといっても、父親が持つか母親が持つかによって、男女に異なったモデリング効果をもたらすという結果であった。なぜそのような違いが生じるのか、今後検討しなければならない課題である。

また、母親評定によれば、母親が拒否的な場合は父親の態度に関わりなく、男児は母親の低い向社会性へのモデリングが生じる可能性が示された。さらに、父親が統制的な場合は母親の態度に関わりなく、男児は母親を向社会性のモデリング対象とする可能性が示された。いずれの場合も男児は母親を向社会性のモデルとしているという特徴があった。

それに対して、父親評定によれば、父親が拒否的な場合は母親の態度に関わりなく、男女児は共に父親を攻撃性のモデリング対象としている可能性が示された。このように、父親に対しては男女児共に攻撃行動のモデルとしていると考えられる。

(調査にご協力くださいました幼稚園の園長先生をはじめ担任の先生方、保護者の方、園児の皆さんに心より感謝いたします。)

引用文献

- 安立奈歩 2001 攻撃性の諸相に関する研究 京都大学大学院教育学研究科紀要、47、475-487。
 岩立京子 1995 幼児・児童における向社会的行動の動機付け 風間書房
 菊池章夫 1988 思いやりを科学する：向社会的行動の心理とスキル 川島書店
 小嶋秀夫・内山知朗・宮川充司 1988 家族関係調査(FRI) 手引き〈暫定版〉名古屋大学教育学部心理学教室
 森下正康 1996 子どもの社会的行動の形成に関する研究 風間書房
 森下正康 1998 幼児期の母子関係が子どもの思いやりにおよぼす影響 和歌山大学教育学部紀要(教育科学)、48、1-13..
 森下正康 2000 幼児期の自己制御機能の発達(1)-思いやり、攻撃性、親子関係との関連- 和歌山大学教育学部紀要(教育科学)、50、9-24。
 森下正康 2001 幼児期の自己制御機能の発達(3)-父親と母親の態度パターンが幼児にどのような影響を与えるか- 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要、11、87-100。
 森下正康 2002 幼児期の自己制御機能の発達(5)-親子関係が家庭と園での子どもの態度パターンにおよぼす影響- 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要、12、47-62。
 鈴木眞雄・松田 星・長田忠夫・植村勝彦 1985 子どものパーソナリティ発達に影響を及ぼす養育態度・家庭環境・社会的ストレスに関する測度尺度構成 愛知教育大学研究報告、34、139-152。
 横塚怜子 1988 向社会的行動尺度(中高生版)作成の試み 教育心理学研究、37、158-162。